

針葉樹会報

1986. 10. 第67号



表紙写真説明

マウント・ケニア

(撮影・引地 真)

<p>発行日 1986年10月30日</p> <p>発行所 針葉樹会</p> <p>印刷所 篠田印刷</p>	<p>針葉樹会報</p> <p>第67号</p>	<p>編集人 〒167 杉並区南荻窪 3-29-23</p> <p>引地 真</p>
--	--------------------------	--



針葉樹会会員名簿(正誤表).....	23
会務連絡先.....	22
昭和60年度決算.....	21
会務報告.....	19
会員近況.....	18
続・僕が休暇中にやったこと	4
引地 真	4
目次	
笛吹川東沢釜ノ沢	2
兵藤 元史	2

笛吹川東沢 釜ノ沢

兵藤 元史

あれは小平の一橋寮に住んで居た頃だから、多分大学二年のことだったように思う。同じ寮生で山好きな友人と、秋の笛吹川東沢を計画したことがあった。その時は折悪しく日本に接近した台風を気にして、ザツクのパッキ

ングまで済ませていたにもかかわらず、中止に決めた。その山行を計画した背景には、先人の東沢についての美しい紀行文があったように思い出す。

それ以来、既に十三年が過ぎた。今回東沢をピックアップした理由は、そんな純粹なものであるはずもなく、実に単純にして明解、「チョンボ（容易）そうである。」というその一点にあった。ガイドブックに依れば「前

夜発日帰り」の沢を、土曜の午後出来るだけ奥まで入って一泊、翌日ゆっくり沢を詰めて、さらにチョンボに”が本山行の基本構想であった。

ともあれ、十三年振りのリターンマッチとはなった。同行は金子氏（四十八年卒）と浅田（五十二年卒）。両氏のこの山行の動機が右述のごときものであったかどうかは定かではない。念の為つけ加える。

前日（八月二十三日）、出来るだけ東沢の奥まで入る予定だった僕等は、しかし東沢へ入って二度渡渉した所で格好なテント場を発見して、日没近しを理由にアッサリとテント

を張った。久し振りのたき火はそれなりに心楽しいものであった。五時五十分にテント場を出る。天気は思いの外良く（というのは、今回も台風が来ていて、前日中中は小雨であった。）、四時頃月明りで、皆一回目覚めた程であった。二十分程進んだ所で大きな滝にぶつかった。どう眺めてみても直登できそうもなく、辺りを見回しながら少し下ると、なんのことはない、左岸十m程上部に立派な登山道がついていた。我々はいささかウツカリしていたが、かつて東沢にも甲武信岳への登山道を作る試みがなされ立派な道が残っていたのだ。小さな祠にまつられた“山の神”の少し先

まで1時間強、その登山道をたどる。眼下にいくつか立派な滝を見た。再び沢に入って膝下の渡渉をくり返す。左右から急できれいなナメ滝がいくつか合流して来るが、本流は一向に傾斜をあげず、いささかぼやきの出始め頃ようやく金山沢出合、そして魚留の滝となった。ガイドブックの記述の通り、滝左手の倒木を利用してこれを越した。「倒木が流れてしまっていたらどうするんですかねえ」とは浅田の弁。

滝上で私はワラジをつけた。ちなみに浅田はフェルト付地下タビ、金子氏は軽登山靴であった。魚留の滝上からナメ滝が少し続き、その後いくつかの滝があったものの、「滝の応接にいとまなし」という程のことも無く、一時間程で荒れた倒木帯に入った。この辺りは広河原と呼ばれているらしいが、これがまた長かった。

ぼやきはここに来て再び始まり、予先は来る予定でいながら仕事の都合で結局不参加となった後輩のMに向けられた。「Mはなかなかの沢ですので、もう一回行っていいですっ

て言ってましたよ」「信じられねえな、何てセンスなんだ」「こんな沢に二度来たいという奴の顔が見たい」等々くり返すうちに、ようやく木賊沢出合。稜線まであと三十分程の所である。

出合にある滝をペンキに導かれつつ登っていて、ようやく気がついた。この沢のつまらなさの原因をである。沢自体の地味さ、滝の数、大小もさることながら、その主たる原因はかつての登山道の痕跡にあるのではないかと。沢登りの一番の楽しみは、沢のもつ原始性に依るのではないかと。

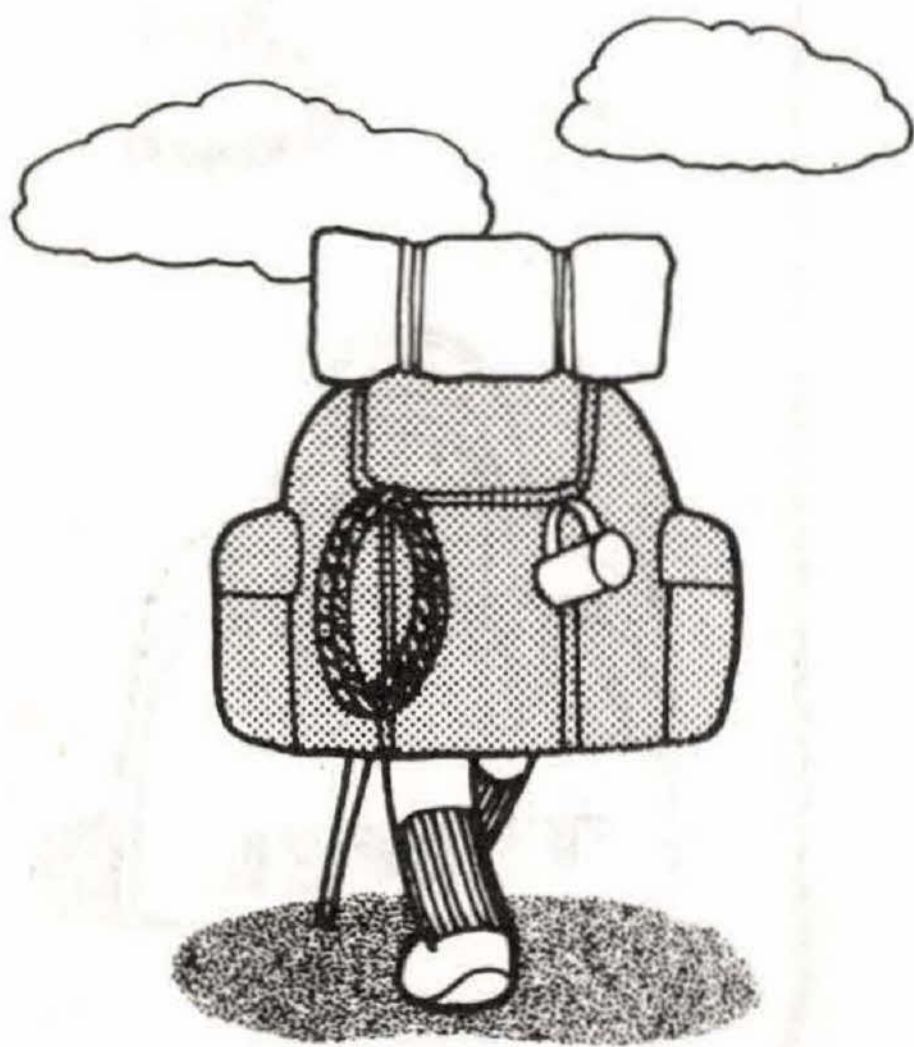
水源にある水汲上げ用のポンプ小屋を横目に見ながら沢を離れた我々は程なく稜線に達した。あいにく上部はガスっており、甲武信山頂を踏むことなく戸渡尾根を経由して下山した。

《タイム》テント場五・五〇、金山沢出合八〇〇、木賊沢出合一・三〇、甲武信小屋一二・一〇、一三・〇〇、西沢溪谷入口バス停一六・一〇

《付記》

タイトルを見て、快適な沢の紀行文を期待した向きには、お詫びを申し上げなければいけないかと思えます。会報に掲載する程の山行でなかったことは、一読明らかであります。

小生、ここ五年程海外に出ているため、諸先輩、後輩の皆様には、長い間御無沙汰致しております。その辺りを会報編集者から攻められて、やむなく拙文をひねりだしたというのが事の真相です。この場を借りて、この間の御無沙汰をお詫びし、また今後のおつき合いの程をお願い致しまして、筆をおきたいと思えます。(一九八六・九・二十三)



続

僕が休暇中にやったこと

引地 真



第四回 ヨーロッパ

(八四年八月十四日〜九月十四日)

中国で暮らして一年近く経った頃から、僕は中国での生活にうんざりしてきた。抑圧感やしじゅう僕にのしかかっている、それから解放されることはなかった。中国人といくら親しくつきあおうとしても、彼らは厚い壁を築いて決して隙を見せない。そのうち僕の方でもあきらめて、自分から積極的に働き掛けようとしなくなってしまった。彼らの生活や考え方を知れば知るほど、僕の力ではどうし

ようもないやりきれなさにとらわれてしまった。それは新疆やチベットを旅行しても、基本的には変わらなかった。僕は次の休暇には中華人民共和国以外の世界に出掛けてみようと思った。

山岳部時代同期だった中西がロンドンに赴任したと聞いていた。僕は彼に会うためにロンドンに行こうと決めた。ヨーロッパをひとりで旅するのはきつとおもしろいはずだ。どのようにして行こうかと計画をいろいろ考えていた時、中国は大陸の一部だと気付いた。

一九八四年八月十五日午前七時四〇分、列車は北京駅の一歩ホームから出発した。車両

の行き先を示すプレートには三つの都市の名が三種類の文字で書かれていた。北京―ウラン・バートル―モスクワ。それぞれ中国語、モンゴル語、ロシア語で。北京からモスクワへは週に二本の国際列車がある。一本は中国東北の満洲里経由でモスクワまで行くもので所要日数は七日かかる。もう一本はモンゴル人民共和国のウラン・バートル経由のもので六日かかる。僕が乗ったのは後者で、僕の切符の行き先はイルクーツクだった。その日の真夜中近くモンゴルとの国境の二連に到着した。そこで僕は出国手続きをして、列車は台車を広軌のものと交換した。翌日、モンゴルの大平原を列車は走り続けた。線路の両側に

地平線が広がり、ずっと景色は変わらない。同じコンパートメントのドイツ人は「まるで海の上を走っているようだ」と、言った。何時間走っても列車の両側の景色はほとんど変わらず、ただ三六〇度の地平線が広がっているだけだった。

翌日朝、目が覚めると列車はバイカル湖のほとりを走っていた。そしてタイガの密林を抜けてイルクーツクに着いたのは、八月十七日午後五時だった。北京を出発してから約五八時間後だった。

イルクーツクから飛行機でモスクワへ飛び、そこからふたたび列車に乗ってポーランドにはいった。僕がポーランドに寄った目的は、ポーランド南部、チェコスロバキアとの国境にあるタトラ山地の山に登ることだった。昨今のポーランド人クライマーのヒマラヤでの活躍には目をみはるものがある。僕は彼らがどのような山で腕を磨いたのか見たかった。そこは標高では二〇〇〇メートルそこそこのしかないはずだ。

タトラ山地の基地はザコパネという町だ。

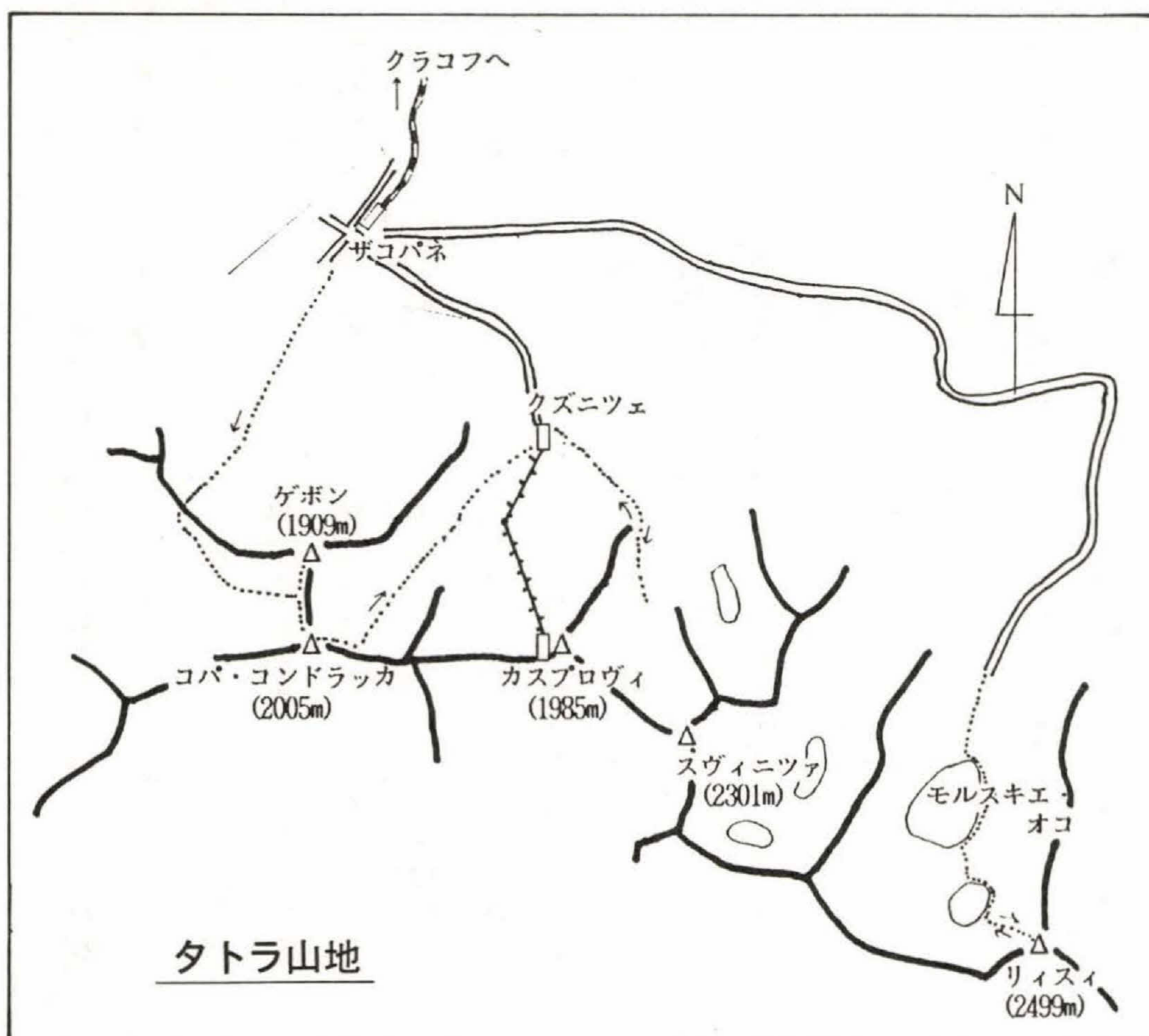
僕はワルシャワでザコパネまでの夜行列車の切符を二時間辛抱強く行列に並んで買った。

八月二四日朝、ザコパネに着いた。宿は四人相部屋のドミトリーを見つけた。そして本屋で山の地図を買ったり、町を

うろつきまわったりして、その日は情報集めと土地勘をつけることに費やした。ザコパネは夏は避暑地として、冬はスキー場として賑わうところで、小奇麗な別荘やホテル、土産物屋が並んでいる。上高地と軽井沢を足して割ったような雰囲気をもっている。かわいいポーランド娘が通りを歩いている。(それにしてもポーランドには何と美人が多いことか！)

翌日はザコパネの街のすぐ南にあり、その頂上の巨大な十字架はいつでも街から見えるゲボン(一九〇九メートル)に登る

ことにした。八時に宿を出発して歩きだした。ゲボンの北面は急峻な壁になっている。そのため登山道は南面を巻いている。曇り空の下、樹林帯の中をひとり歩いてみると、久し振りに山に来ることができた喜びが沸いてきた。



樹樹の葉、草のにおい、足下の小さな花、小鳥の鳴き声、僕はそれらの名前を知らないが、それらが僕に与えてくれる安らぎは知っている。僕が一步步毎に、塘沽で閉ざされていた僕の心が開かれるのを感じた。初めてのタトラの山だったが、僕はすごくリラックスできて、「帰って来た」という感じを強く持った。タトラの山のたたずまいが日本の北アルプスの山によく似ていたせいかもしれない。

森林限界を越え、最後の急登を終え、十一時ゲボンの頂上に着いた。巨大な鉄塔のような十字架の下で、おおぜいのポーランド人登山者が珍しい日本人登山者の登頂を祝福してくれた。僕は続けてチェコとの国境稜線を縦走しようとしたけれど、激しい雨が降ってきたため、コパ・コンドラッカ（二〇〇五メートル）という国境上の小ピークに立つただけでザコパネの街に下ってしまった。

翌日は、宿で同室になったポーランド人のトムとプレッツが推薦してくれたスヴィニツア（二三〇一メートル）に向かった。途中までは彼ら二人といっしょだった。あいにくこ

の日は朝から雨で、途中の山小屋までしか行くことができなかった。その山小屋で雨宿りしながら彼らからポーランドの山の話や生活について、いろいろ聞くことができたのは収穫だった。僕はお礼に日本山岳会の手拭いをあげた。

僕はすでにクラコフ行きのバスの切符を買っていたので、ザコパネにいられるのは、あと一日だけだった。バスの切符を買い直すなんて、その手間をすこしでも考えただけでいやになる。従って、僕は何としても思いでザコパネ最後のその日はポーランドの最高峰リイスイ（二四九九メートル）に登ることにした。僕の決意は固く、前夜は早く眠るために、魅力的なポーランド娘の誘いを断ってしまったほどだった。

そのかいあって雨はあがった。リイスイの登山口のモルスキエ・オコまではバスに乗って行かなくてはならない。僕は前日予約しようとしたら、当日の朝来いと言われた（と思った）。ところが、十分に早起きして駆けつけて行列に並んだバス・ターミ

ナルの窓口では切符を頑として売ってくれない。なにしろ僕はポーランド語はまったくわからないし、ほとんどのポーランド人は英語がわからないのだ。そんな時それまでは行き先を書いた紙を見せればすべてうまくいったのに、なぜかこの時はだめだった。僕は仕方なくタクシー乗り場に行った。ところがタクシーの運転手も手を振ってだめだという素振り。そこで僕は東欧では水戸黄門の印籠と同じ効き目を持つドル紙幣を見せた。すると運転手の表情が変わり、僕は助手席にすべりこんだ。

モルスキエ・オコはタトラの峰々に囲まれた標高一三九三メートルにある美しい湖だ。その湖のほとりの小屋で紅茶とビスケットで軽く腹ごしらえをして出発した。

モルスキエ・オコからすこし登ったところにもうひとつ湖があった。そこで兵士が立つてバスポート・チェックを行っていた。リイスイはチェコスロバキアとの国境上の山で、チェコ側からも登山道があるためポーランドからの密出国のチェックが行われているのだ。

トムとプレッツの話によると、以前はポーランドから他の東欧諸国へは自由に行くことができたが、ヤルゼルスキ政権ができて以来、それが禁止されたそうだ。比較的物資の豊富なチェコへ買い出しに行くポーランド人が以前は相当いたそうだ。僕は赤い日本国のパスポートを見せ、ノートに行先等を記入してそこを通過した。

ゆるやかな谷は徐々に傾斜を増し、狭くなってきた。それにつれて天候も悪くなってきて、ガスがかかってくる。小雨のようなガスは冷たく、寒さのため岩肌にはそれが凍り付き、白い霜となってまわりの岸壁を覆っていた。ルートは谷をはなれ、その左側の岩稜につづいていた。僕は今回の旅行には特別な登山道具は何も持ってきていなかった。ジーンズにTシャツを着て、ジョギング・シューズを履いていただけだった。他には雨具兼防寒具としてヤッケが一枚きりだった。真夏の二〇〇メートルそこそこの山でこんなに寒くなるとは想像もしていなかった。僕は凍って滑りやすくなった岩の上を慎重に進んだ。稜

線から下は濃いガスのため何も見えない。こんなところでスリップでもしたら大変なことになるだろうな、と考えたりした。僕がこんなところの山を登っているなんて、さっきのチェック・ポイントの兵士以外は誰も知らないのだから。

十二時、頂上に着いた。ガスで視界はさえずられて、展望はまったく見えない。僕は冷たい風に吹かれながら、山に居られることの幸せを感じていた。そこがポーランドの最高峰だからではなく、僕が登ろうと決めていたところにちゃんと到達できた嬉しさが、僕に満足感を与えてくれた。この感じは実に久々のものだった。ボゴダやチベットで味わえなかったものが、この小さな日帰り登山で味わえたのだ。

僕がザコパネに滞在していた時は、天気がいまより良くなり、ほとんど青空が見えなかったため、タトラ山地の地勢はよく見ることができなかった。けれども、少なくとも僕が歩いたところの様子はとても日本アルプスに似ていた。標高は二〇〇〇メートル峰でも、日

本の三〇〇〇メートル峰と同じだけの険しさをもっている。リースイヤスヴィニツア周辺には大きな岩壁も見えた。冬季は気候の厳しさもあり、相当困難な登攀も行われているようだ。しかし、氷河はもちろん、夏の雪渓もない。タトラで育った優秀なクライマーは乏しい外貨を持って西部アルプスへ行ったり、ソ連のコークサスやパミールに行ったりしてヒマラヤのビッグ・クライミングにそなえているらしい。僕の短い滞在中にはそんなクライマーの姿は目にするのができなかったが、老若男女の大勢のハイカーには出会った。宿で同室になったトムとプレッツもそのような若者で、今まで岩登りはしたことがないと言っていた。彼らは地元南部ポーランドの丘陵地帯の森の中を歩きまわったり、バック・パッキングのようなことが好きで、クライミングは機会があればやってみたいという程度だ。彼らによると、ポーランドで最も有名な登山家はアンジェイ・ザヴァグで、その次はワンダ・ルトキエヴィッチだそうで、どちらも大御所といった人物だ。しかし、ヴォイチ

エフ・クルティカやイエジ・ククチカといった現在ヒマラヤで活躍しているポーランド人クライマーの名を彼らは知らなかった。彼らのような普通の人には当然のことだろう。国内の山のスケールと登山人口を考えると、現在のポーランド人クライマーのヒマラヤでの活躍はやはり驚異的と言っていいだろう。

僕はザコパネからポーランドの古都クラコフ、チェコスロバキアのプラハを経て、オーストリアに出た。久し振りの西側世界の明るさ、情報の多さ、合理的なサービスに異常に感激し、物価の高さに戸惑った。なにしろ駅の窓口では瞬時に切符が買え、列車の時刻とホームの位置を教えてくれた。中国や東欧では考えられないことだ！

九月二日、快適な列車でオーストリアのインスブルックに着いた。チロルの山々に囲まれたこの町は、冬季オリンピックが二度開かれたことで有名だ。

翌日は無料のガイド、送迎バス付のハイキング・ツアーに参加した。ハイキング自体は極めて楽なもので、まったく退屈なだけだっ

たが、アメリカ人、ドイツ人、オーストラリア人、イスラエル人の旅行者と仲良くなれ、旅の情報交換やら、それぞれの国の生活の話やらができた。

次の日はもう退屈なハイキング、ツアーには参加せず、インスブルックのアルパイン・クラブのおじさんに推薦されたルートにひとりで行ってみた。インスブルックから郵便バスに乗り、南のスチュバイタルのフルプメスマで行き、そこからリフトを乗り継ぎセンヨッホ（二一九〇メートル）に着いた。そこから歩きだした。天気は快晴で、スチュバイタルプスの峰々と氷河が見えた。僕は駆けのように気分良く稜線を進んだ。出会う人も少なく、平坦なところでは本当に走りだしていた。シュリツカー・シースピツェ（二八〇四メートル）という岩峰に攀じり、頂上のノートに名前を記入した。そこからの景色は抜群で、チロルの峰々が四方にあり、それらすべてに登ってみたい誘惑にかられる。しかし、時間がないのでそれは次の機会にとっておくことにした。さらに一気に駆け下った。

麓の小屋で飲むビールの味は格別だった。

それから二日間、インスブルックは雨だった。僕は友達に手紙を書いたり、山岳博物館を見学したりした。ケーブル・カーでハフェレカル（二二六九メートル）に悪天候の中登ったら、雨雲のうちは大雪だった。すでに積雪は二〇センチメートルくらいあった。ヨーロッパ・アルプスは夏でも雪が降ると聞いていたが、それはもっと標高の高い所の話だと思っていたので、僕はびっくりした。ケーブル・カーの駅員に尋ねてみたら、このあたりでもこの時季にこんなにくさんの雪が降ることは珍しいと言っていた。

九月六日、僕は列車の窓から新雪のついたチロルの山々を見送りながらインスブルックを後にした。翌日、カレーでドーバー海峡を渡るフェリーに乗り込む時、鼻をくすぐる潮の香りが、僕に渤海の景色を思い起こさせた。僕は三週間前には、このユーラシア大陸の東端の土地でちがう海を眺めていたのだ。そして今、大陸の西側の海に出会った。どんよりした曇り空の下に広がるドーバー海峡の海を

見つめながら、僕が考えていたのは、横切つて来たユーラシア大陸の大きさとそこで出会った人々のことだけではなかった。ドーバーの白い壁が見えてきた時、僕はこの旅ももう終わりに近付いてきたという寂しさにとらわれていた。楽しさの終着駅が見えてきたのだ。

ロンドンでは中西が駅まで迎えに来てくれた。空しさをまぎらしてくれるのは、いつもいい友人だった。僕は彼のフラットに居候して過ごした。また、藤本氏もロンドンに赴任してきており、久し振りに気の置けないメンバーで楽しい時を過ごすことができた。何といっても日本語で冗談を言いあえるということは、僕にとって最も気楽だった。

第五回 ケニア

(八五年一月十九日～二月十八日)

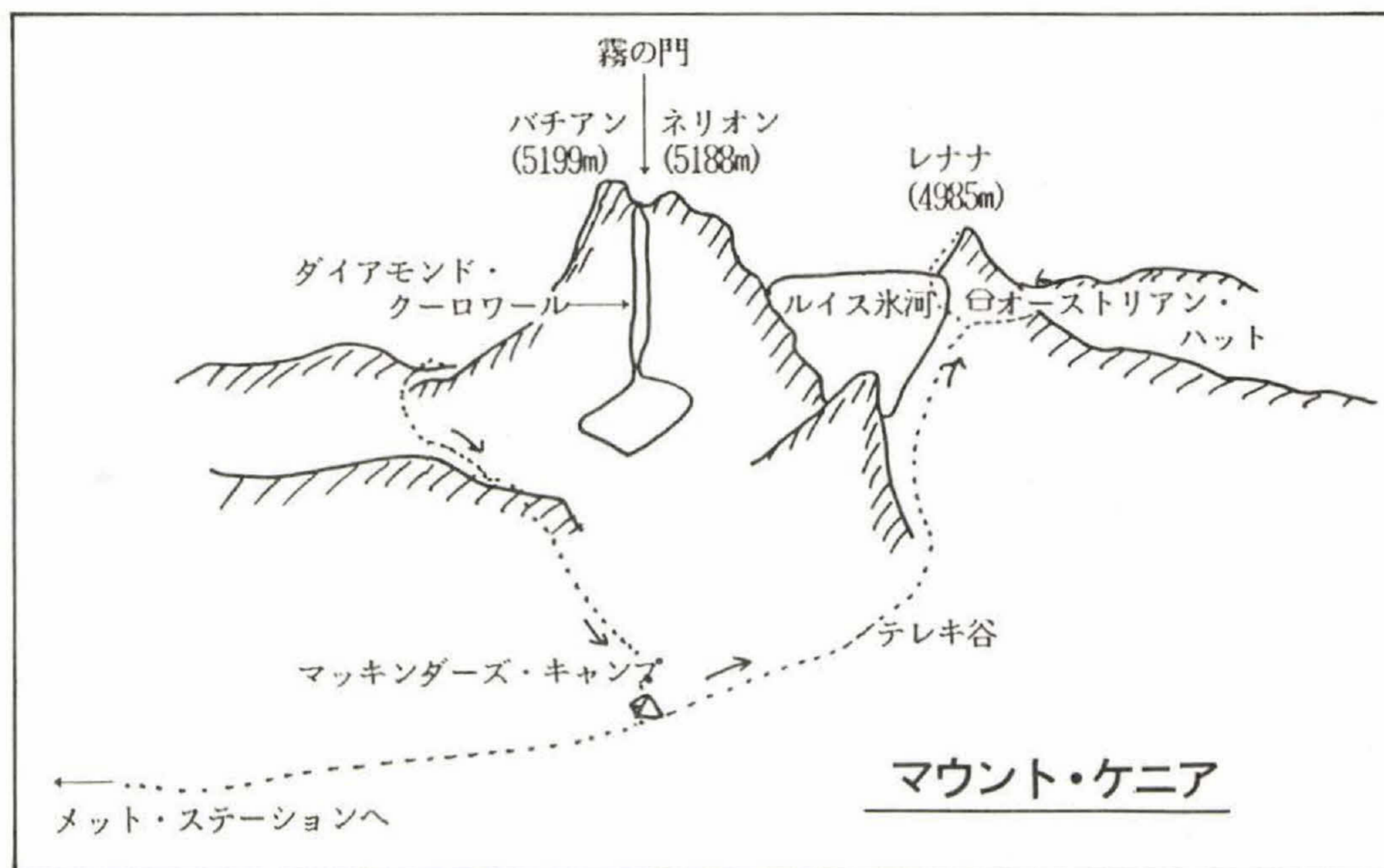
僕の今度の休暇は一九八五年一月から二月にかけて取れることになっていた。その時期は北半球は厳冬期にあたるので、僕ひとり

充分登れる山はちょっと見当たらなかった。そこで南の山をいくつか調べてみた。(その際、ロンドンの本屋で見つけてきた“GUIDE TO THE WORLDS MOUNTAINS” by Michael R. Kelsey という本がとても役に立った。世界中の三三七の山の案内と地図があり、そのほとんどが著者の実地の経験に基づくものである。)各地の天候、費用等を考えあわせ、僕は最終的にアフリカのキリマンジャロ、マウント・ケニアを選んだ。この時期の東アフリカは天候も良く、どちらも高度を別にすれば、技術的困難がなくピークに立てるという点を考慮した。

僕のこの計画に参加したいという人が現れた。同じ事務所で働いている清水さんと原山さんだった。清水さんは前年いっしょにチベットに行った人だ。もちろん大歓迎だ。とりあえず三人で出掛ける準備をすすめた。ところが休暇取得の際、業務の都合で、清水さんの休暇が予定より早くなってしまった。そこで、清水さんは一月はじめにいったん日本に帰り、僕達と香港で合流し、三人でキリマン

ジャロに登り、清水さんはそれから帰国(中国へ)、残る原山さんと僕の二人でマウント・ケニアに行くというプランができあがった。

さて、一月一八日、準備万端整えて宿舎から一步足を踏み出したとたん、僕はツルリステンと転んでしまった。何とみぞれ雪が降っており、道路の表面が凍っていたのだ。この雪のせいで、計画とはまったく違った行動をとることになってしまった。というのは、僕達はこの日の午後香港で清水さんと合流し、夜香港発の飛行機でナイロビに行くことになっていたが、この雪のため僕達の予定していた天津から香港への飛行機が飛べなくなりました。翌日の飛行機で香港に着いてみると、清水さんは予定通りの飛行機でナイロビに向かったことがわかった。僕達は次のナイロビ行の便を捜したが、直行便は一週間後しかない。そのため原山さんはその夜の飛行機でカラチまで行って、そこでナイロビ行の便をつかまえることにして香港を飛び発った。一方、僕は四日後のボンベイ経由ナイロビ行の便に乗ることにして、それまで広州の兵藤



さんの友人のところにおじゃましようかと香港から列車で再び中華人民共和国に戻った。一月二五日午前八時、僕はようやくナイロビにたどり着いた。予定より約一週間遅れての到着なので、キリマンジャロかマウント・ケ

ニアのどちらかひとつだけ登ろうと考えていた。予約していたホテルに着くと、原山さんからのメッセージがあった。彼は前日ナイロビに着いていて、別の宿に泊まっていた。そしてキリマンジャロに行くつもりだと言った。僕はむしろマウント・ケニアの方がおもしろそうだと思うのでそちらに行くと言った。清水さんの行方は分からないが、たぶんキリマンジャロへ行っているだろう。ここで三人はそれぞれ別々に単独で行動することになった。

標高一七〇〇メートルのナイロビで体を慣らした後、一月二八日僕はバスで大都会のナイロビからマウント・ケニアめざして出発した。バスの運転手と車掌は途中でその役目を交代しながら、アフリカの高原地帯をエンジンをめいっぱいふかせながら走っていった。よく舗装された道路を約五時間でナロモルに着いた。僕はナロモル・リバー・ロッジにチェック・インした。

マウント・ケニアは僕が大学二年生の時、佐藤、松田両先輩が訪れているので、馴染み

がないわけではない。マウント・ケニアはいくつかのピークから成り、その最高峰はバチアン（五一九九メートル）という。そのバチアンと霧の門（ゲイト・オブ・ザ・ミスト）をよんで双耳峰のもうひとつがネリオン（五一八八メートル）。この二峰はいずれもロープを使用した岩登りまたはアイス・クライミングの技術がないと登れない。中国に来て以来岩登りをしていない僕にはちよつと無理のようだ。だいいち今回はパートナーがいない。そこで第三高峰レナナ（四九八六メートル）となる。これはほとんど技術的問題がなく登れる。今回の僕の目標はこのレナナ峰となる。また、マウント・ケニアは赤道直下にある。また、小さいながら一五の氷河を持ち、三〇を越える氷河湖がある。そこでピークのまわりをぐるりと一周するルートは非常に魅力的な山歩きのコースとなっている。僕はレナナ登頂後、この周遊ルートに行くことにした。

マウント・ケニアは国立公園になっており、単独行者の入山は公園ゲートで止められるこ

とになっている。マウント・ケニアの山麓森林（ジャングル）地帯がライオンなどの猛獣の生息地になっていて危険だからというのがその理由だが、その真偽のほどは分からない。それはさておき、僕も単独行者だからガイドかポーターを雇わなくてはならない。それらはすべてナロモル・リバー・ロッジでアレンジできる。僕は、①ナイロビに着いて以来体調が思わしくない、②前年チベットで高山病になっているので高度に対して不安がある、③決して金銭的余裕がないわけではない、という理由で、ガイド、ポーター、食糧、山小屋使用料、燃料、アプローチの車代等すべて含まれているツアー（Foot Safari）を選んでしまった。これはちょっと高いのだけれど、とにかく山の中では僕は軽い荷で歩くだけでいい、というまったくの大名旅行、王様気分の味わえるきわめてイージーなものだ。この夜、マウント・ケニアから下りて来たばかりのドイツ人にこの費用を話したら、驚いて目を丸くしていた。もっとも彼らは最低費用（公園入場料、キャンプ料だけ）で登って来たば

かりだからだ。また、彼らからは山の天候やルート状況などの情報も教えてもらった。翌朝、目をさますと快晴。初めてマウント・ケニアが見えた。朝食後、トヨタのランドローバーに乗ってナロモル・リバー・ロッジを出発した。途中の村でガイドとポーターをひろって公園ゲートに到着した。ここでルートと下山予定日をノートに記入した。さらにドロ道を4WDで進み、ロード・ヘッドのメット・ステーションに着いた。この日は標高三〇四八メートルのここに泊まる。つまり、この日は少しも歩かなくてもかまわないわけだ。しかし、それでは次の日からの登山に差しつかえるので、山道を四〇〇メートルくらい登ったり、また道路を下って登りかえしたりして高度に体を慣らした。この段階での高度順応がとても重要であることは前年のチベットでよくわかっている。

この夜、同じ小屋にオーストラリア人のポールとサイモンがいっしょに泊まった。翌日はこの二人といっしょに歩きだした。彼らは二人とも医者で、僕が高山病が心配だと言うと、俺たちは医者だから安心しろと言っていた。しかし、二人とも山登りの経験はあまりないらしく、この日の行程の最後の頃は相当バテていたようだ。

この日の天候は、朝は快晴だったけれど、一〇時頃から雲が湧いてきて、午後一時頃から雨が降りだし、かなり激しく降った後、夕方五時頃には止んで再び晴れ間が広がってきた。このパターンは僕がマウント・ケニアにいた間中毎日続いた。従って、行動はできるだけ午前中の天候の良いうちにすませてしまわなければならない。この日の目的地のマツキンダーズ・キャンプ（四一五〇メートル）に着いたのは午後一時四五分で、小雨になっていた。

夕方、雨が上がり雲が切れてきた時、マウ
ント・ケニアの美しい双耳峰バチアンとネリ
オンが目の前に見えた。そしてその両峰の中
間の霧の門につき上げるダイアモンド・ク
ロワールの白いひと筋がひとときわあざやかに
僕の目に映った。ダイアモンド・クロワ
ールは世界でも最も困難で、かつ印象的なアイ
ス・クライミングのルートとして世界のアル
ピニストの中で有名な存在となっている。そ
れが今僕の目の前に姿を現したのだ。僕の胸
が高鳴るのも無理もないことだ。

マッキンダース・キャンプで一泊した後、
いよいよレナナに向かう日となった。ポール
とサイモンは前日のバテかたと今朝の様子を
みると、レナナに行かずにそのまま下山する
みたいだ。一方、僕の予定はレナナに登頂し
た後、山の北面に廻りこみ、カミ・ハットに
泊まることになっていた。僕はポールとサイ
モンに見送られて、七時三〇分マッキンダ
ース・キャンプを出発した。

テレキ谷源頭の巨きなカールを、横目にバ
チアン、ネリオンの岩壁を見ながらひたすら

登って稜線に達したところ、ルイス氷河の端
にオーストリアン・ハットがある。標高は四
七九〇メートル。ここはネリオンやバチアン
へのクライミングの基地となるところだ。こ
こからレナナへは指呼の距離だ。対面の圧倒
的なネリオンの岩壁を眺めながらルイス氷河
を登りつめると、レナナのピークに達した。
時刻は一〇時三〇分だった。この次はバチア
ンとネリオンの岩壁を登ってやろうと思いな
がらオーストリアン・ハットに引き返した。

オーストリアン・ハットから東面に廻りこ
んでピーク一周のトレッキングが始まった。
トレイルはあるにはあるが、あまりはつきり
しているわけではない。ただ小さなケルンが
たくさんあり、それをたどって行けば迷うこ
とはない。小屋根を二つ越し、三つめの屋根
に達したところがシンバ・コルだ。シンバと
はスワヒリ語でライオンという意味だ。シン
バ・コルからは北面グレゴリー氷河の下部斜
面をトラバースしながら下って行った。マウ
ント・ケニアは赤道直下にあるため、四月か
ら九月は北面に日が当たり、十月から三月は

南面に日が当たる。すなわち、この時期は北
面は日が当たらないため、氷が多く残ってい
た。おそらく毎日の雨が北面では雪になって
いたのだろう。ルートは新雪が凍った斜面の
うえに続いていた。ロボートは普通の登山靴
を履いていたし、僕はビブラム底の軽登山靴
を履いていたが、ポーターのジャブバンはゴ
ム長靴だった。それでは凍った雪面にキッ
ク・ステップするためのエッジがきかない。
また、ジャブバンはあまり雪の上を歩いた経
験がないらしく、ビクビクしてなかなか進ま
ない。もちろん、僕達のだれもアイゼンやピ
ツケルを持っていないわけではなかった。そこ
で僕は彼の荷物を背負ってやり、おもいきり
強くキック・ステップを切って彼を後続させ、
なんとかトラバースさせることができた。

その雪の斜面を横切り、少し下ったところ
にカミ・ハット（四三五〇メートル）がある。
そこは大勢のツーリストが登るルートから外
れているらしく規模は小さく、少し薄汚れた
小屋だった。しかし、きれいな氷河湖のほと
りにあり、バチアンの北面の雪の付いた岩壁

が間近に見えた。

翌日はカミ・ハットからピークの西側を廻って南側のマッキンダーズ・キャンプに戻って来た。すなわち、僕達はピークを中心として時計と逆回りに一周したことになる。僕は少し頭痛がして、食欲はなかったけれど、歩くことに関しては全く問題なく、ガイド・ブツクのタイムよりもかなり短いタイムで歩き通すことができた。とりあえず、はじめに考えていた通りの山歩きができたことに満足して、メット・ステーションに下った。

メット・ステーションでは頭痛もなくなり、食欲もでてきた。この夜、ロバートの作ってくれた夕食を初めて残さず全部食べることができた。

翌日、ナロモルに戻り、ロバートといっしょにナロモルの街に出て、ビールを飲み登山の成功を祝った。ここで特筆しておきたいことは、ケニアのビールが非常にうまいということだ。きめの細かい泡と、適度のコクをもっている。しかし冷やして飲むことは、それほど一般的ではなくて、ロバートもなまぬる

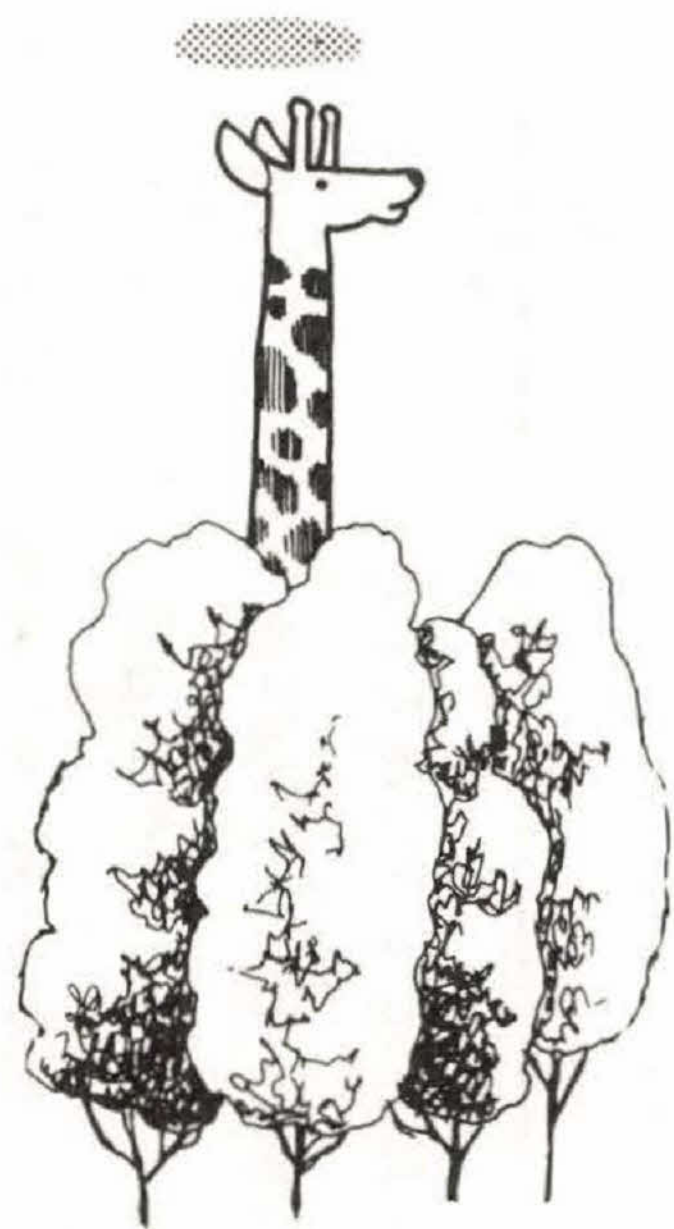
いビールを飲んでいた。また、飲み物の話だったのでついでに言っておくと、ケニアではコーヒーも紅茶もどちらもうまいということを見つけた。コーヒーには「キリマンジャロ」という世界的に有名なブランドがあり、特にインド洋岸のモンバサあたりはアラブ文化の影響を強く受けているので、濃いアラビア・コーヒーが飲める。また、紅茶もケニアの重要な産業のひとつで、彼らはインド式にやかって煮て砂糖とミルクをたっぷり入れて飲む。もちろん、マンゴーやパイナップルなどのフルーツも豊富だから、そのジュースもうまい。

僕は翌日マタトウ（バンを改造した乗合自動車）に乗ってナイロビに帰った。その後は正しい観光客となって、サファリに出掛けてライオンやシマウマ、カバ、イボイノシシ等を見たり、インド洋岸のビーチに寝ころんで何日間か過ごした。

ビーチの椰子の樹の下にころがって手紙を書いていると、皆（ビーチで休暇を過ごすヨーロッパ人と、ホテルの従業員のケニア人）珍しそうにのぞきこんで来る。彼らには日本

語がおもしろいらしい。日本語には三種類の文字、すなわち漢字、ひらがな、カタカナがあり、それを時と場合にに応じて使いこなさなくてはいけない。また、漢字は時と場合にに応じて発音がいくつかわ異なる（音読み、訓読み）等、僕は説明してやるが、なかなか理解できないみたいだ。日本人はこんなに難しい言葉を自由に使いこなせるから頭がいいんだ、と言ってやると、彼らは本当に感心してしまう。あとはいいかげんな返答でごまかしながら、僕はひたすらポケットとビーチに寝ころがって残された休暇を過ごした。

塘沽に戻ってから、清水さんも、原山さんも無事にキリマンジャロに登ることができ、それぞれ楽しい休暇を過ごしていたことが分かった。



第六回 アメリカ

(八五年七月十六日～八月五日)

僕の中国駐在の任期は三年だったから、一年に二回ずつ取れる休暇も今度が最後になった。目的地はもう決まっていた。ヨーロッパ、アフリカと行ったから、次はアメリカだった。僕がケニアのビーチに寝ころがって書いていた手紙の宛先はワシントンDCに住む佐藤活朗先輩だった。手紙の内容は、「今年の夏、いっしょに北アメリカの山を登りませんか？」佐藤さんからOKの返事が届いた頃、さらに、僕達の計画に日本からの参加希望者が現れた。現役山岳部員の谷口君だった。願ってもないことだった。僕のそれまでの五回の休暇の旅行はすべて単独行動か初めてのパートナーとだったので、気楽な仲間が欲しかったところだった。やっと気心の知れた一橋山岳会のメンバーと山に行けることになった。目的地はワイオミング州のグランド・ティトン

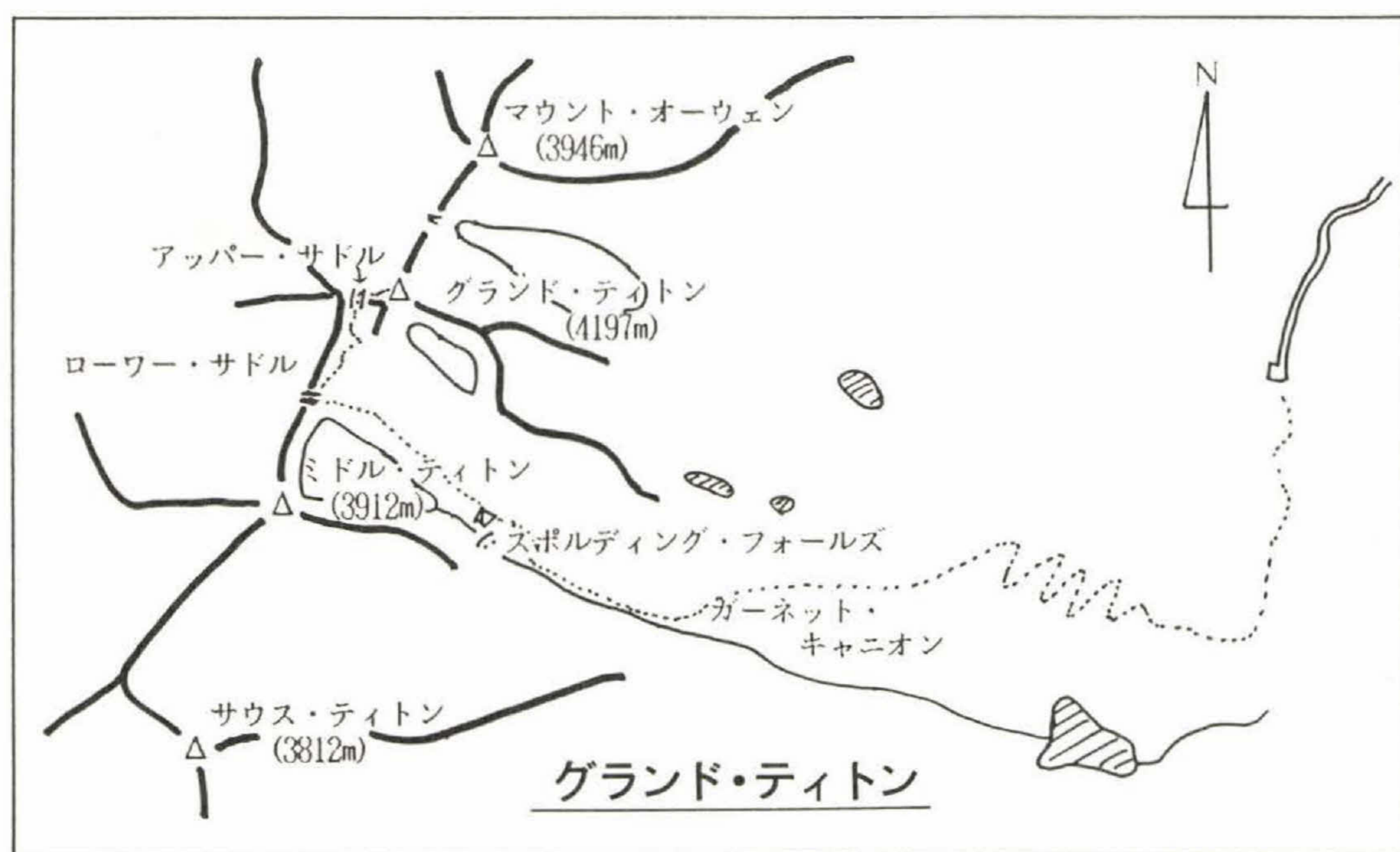
(四一九七メートル)と決まった。

七月一八日、サン・フランシスコ空港で谷口君と落ちあい、ソルト・レイク・シティ行きの飛行機に乗り込んだ。僕は谷口君と会うのはこの時が初めてだった。飛行機の中で、僕は彼から刊行されたばかりの針葉樹第十四号を手渡され、そのページを繰りながらなつかしい日本の皆の様子を彼から聞いた。

僕達はまずユタ州のソルト・レイク・シティに着いた。そこには、先輩の加地さんが住んでいる。僕達はさっそく加地さんに電話を入れた。事前に連絡をしていたので加地さんはすぐに僕達のホテルにやってきてくれた。加地さんは親切にも夕食をごちそうしてくれた。三人とも会うのはこの日が初めてだったけれど、話はおおいにはずんだ。世代の違う三人が、ごく自然に打ち解けて会話が進むのは、山岳部という共通の場を持っているからで、いまさらながら山岳部の良さを確認できた。

翌日は、加地さんの案内でソルト・レイク・

シティ近郊の山にハイキングに出掛けた。ソルト・レイク・シティは四方を山に囲まれていて、冬はスキーに、夏は登山にとっても素晴らしいグラウンドに恵まれている。僕達はそ



のうちのワサツチ山地の山で楽しいハイキングをすることができた。加地さんからはこちらの山の様子をいろいろ教えていただいた。グラント・テイトンの登攀に向けてのちょうど良い足慣らしにもなった。また、僕達はソルト・レイク・シティでは加地さん一家にはなにからなまでに世話になった。ここで改めてお礼を申し上げたい。

僕は次の日ワシントンDCに飛び、アメリカ文明のすごさに大感激、大興奮しながら佐藤さんのお宅に泊めていただいた。立派な建物、整然と走る車の流れ、夜の明るさ、機能的なサービス、住まいの豪華さ、緑の多さ、等々、中国の生活とは何という違いなんだろう！

七月二一日、僕はグラント・テイトンの登山の基地となるワイオミング州のジャクソンで、再び谷口君と合流した。そして、遅れて佐藤さん夫妻もやってきた。グラント・テイトンへの準備は整った。

雨ですこし待たされたが、七月二四日、ようやく天気も良くなってきそうなので出発す

ることにした。いよいよグラント・テイトンの登攀だ。まず、レンジャー・ステーションに立ち寄り、目標とする山、ルートの届けを提出して、テントの設営する場所の指定を受けた。それからトレイル・ヘッドのルーピン・メドウズまで車で入った。アメリカではどこに行くのも車がないと、まったく身動きがとれない。

そこから佐藤さんの奥さんに見送られ、僕達三人は歩き出した。最初はよく踏まれたトレイルをひたすら歩くだけだった。前日までの雨がまだ残っているかのように、濃いガスが僕達を包んでいた。僕達の目指すのはオーウェン・スプルディング・ルート。グラント・テイトンの初登ルートで、一八九八年の初登メンバーの名がルートに残っている。グラント・テイトンで最もやさしいルートとされている。しかし、初登以来二五年間再登されなかったこのルートは決して容易な「一般ルート」ではない。

樹林帯の九十九折りの登りからトレイルはガーネット・キャニオンの広いモレーンに続

いていた。このあたりからガスが晴れてきてミドル・テイトンの岩峰と氷河が正面に見えてきた。スプルディング・フォールズの傍らのトレイルを息を切らしながら登ると、僕達のキャンプ・サイトのケイヴに着いた。テントを張り終えた後、翌日の下見を兼ねてローワー・サドルまで登ってみることにした。ミドル・テイトン氷河のモレーンのうえをさらに進むとローワー・サドルに通ずるヘッド・ウォールに達する。下から見た時はどうして登ろうかと思っていたのだが、近くで見るとそれほど難しそうでもないし、太いフィックスト・ロープもあり、問題なく登れた。ローワー・サドルは標高三五四九メートルで、冷たい西風が吹いていて、そこに張られていたテントを揺らしていた。

翌日はいよいよグラント・テイトンへのアタックだ。テントを出て空を見上げると、きれいに晴れていた。その晴天が今日一日続くことを祈って出発した。ローワー・サドルまでは前日通ったところなので問題なく、ヘッド・ウォールも順調に通過した。ローワー・

サドルからアッパー・サドルまでは、脆くて複雑な滝谷を思わせるようなガリーを登る。右に左にとルート・ファイディングに気を使いながら登り続けるとようやくアッパー・サドルに着いた。

ここからがこのルートの核心部となる。僕はここでアンザイレンした。アッパー・サドルの北側は急峻な壁になっており、ルートはその壁に連なるグラウンド・テイトン西壁に取られている。僕がトップでその西壁に水平にはしるレッジにそって左側にトラバースして進んだ。僕にしてみれば三年振りの岩登りになる。僕は大きなハンド・ホールドに恐々としがみつきながら進んで、このトラバースを終え、ピッチを切った。次のピッチは真上に上がるチムニーからハンド・クラックを登る。チムニーの中には雪が詰まっていて寒い。しかし、その上のクラックは高度感抜群で思わず寒さを忘れてしまうほどだ。ルートには残置ピトンはほとんどないので、僕はフレンズでプロテクションを取りながら進む。僕はいまいち調子が出ない。いつもの岩を攀じる

時の高揚感が湧いてこないのだ。久し振りの岩登りのせいだろうか。寒さのせいだろうか。

大きなテラスで次のピッチのことを思索している。下から二人のアメリカ人が上がって来た。何と彼らは短パンに運動靴という軽装で、ノー・ザイルで上がって来たのだ。彼らは「たいへん寒い」と言いながら、僕達を追い越して、氷の詰まったオーウェン・チムニーをそのままノー・ザイルで登っていった。彼らは今朝下から上がってきて、一日でグラウンド・テイトンを登ってしまおうというのだ。僕達はあきれかえりながら彼らを見送った。

僕は彼らの後に続いてオーウェン・チムニーを登り出した。ガイド・ブックによると、ここは「氷がない時はやさしい。しかし、氷があると極めて難しい。」とされている。そして、この時はまさしく氷に覆われていた。登り出すと、案の定、僕は途中で行き詰まってしまった。ベルグラの張った岩はいやらしく、指先は冷たさで感覚がなくなってきた。こんな難しいところをあのアメリカ人達はノー・ザイルで登ってしまったのだ。僕は比較的安

定したフット・ホールドに戻り、指先を温め、自分を奪い起たせた。ハンマーを振るってベルグラを落としている時、集中力が戻ってくるのを感じた。一歩進み出したとたんアドレナリンが体を駆けめぐり出した。僕は一気に登った。あの高揚感が体によみがえってきた。さっきはつかめなかったホールドが今度は自信を持ってつかむことができた。気が付くとチムニーを抜けて、僕はビレイ・ポイントに立っていた。

そこから左上する雪まじりの岩場をコンテイニユアスで進むと陽の当たるグラウンド・テイトンの頂上だった。僕達はがちりと握手し、頂上からの雄大な景色を満喫した。

頂上ではしばらくくつろいだ後、下降にかかった。まずクライミング・ダウンでオーウェン・チムニーのうえの大きなバンドまで下りた。そこを少し左側に行ったところにアプザイレンの支点がある。そこから約四〇メートルのアプザイレンで直接アッパー・サドルに降りられる。ただし、僕達がそこに着いた時はすでに大勢のアメリカ人がアプザイレンの

順番待ちをしていた。彼らは地元のクライミング・スクールのガイドに率いられた初心者の一団だったので、アップザイレンにとっても時間がかかっていた。僕は仕方なくじっと坐って彼らが終わるのを待った。一時間半ほど待ってようやく僕達の順番となった。すばやくザイルをセットしてアッパー・サドルに降りた。最後の一〇メートルは完全な空中懸垂だった。

僕達は今日中に下まで降りなくてはいけなかった。あまり遅くなると、下の駐車場まで迎えに来てくれる佐藤さんの奥さんが心配するだろう。僕は若くて元気な谷口君に先に走って下ってもらうことにした。佐藤さんと僕は後からテントを撤収して、果てしなく続くと思われる下り道をくたびれきって歩き続けた。けれども心の中はクライミングの充実感と満足感で一杯だった。この一日はおそらくずっと忘れられないだろう。

佐藤さん夫妻と別れて、谷口君と僕は同じワイオミング州のウインド・リバー山脈に行くことにした。ワイオミング州の最高峰のガ

ネット（四二〇八メートル）に登るためだった。

七月二七日、ジャクソンから快適なドライブでトレイル・ヘッドのエルクハートまで入ってテントを張った。ここはグラント・ティントンは違って訪れる人も少ない。

翌日、森の中のトレイルを歩き始めた。いかにもウィルダネスという言葉がふさわしい原野を僕は歩き続けた。かなりアップ・ダウンのあるトレイルが、美しい針葉樹林、氷河湖、草原、お花畑を結んでいる。人も少なく、美しい場所だったが、僕達が訪れた時は天候が悪かった。毎日激しい雷をともなった雨や雹が降ってきた。そのため僕はガンネットに登ることができず、ウィルダネスを歩いただけで戻らざるをえなかった。

八月二日、僕はジャクソンを後にした。ロサンゼルス、香港経由で塘沽に着いたのは八月五日だった。それから一カ月あまり後、僕は三年間の中国での勤務を終え、日本に戻って来た。たくさんのとおきおきの思い出を携

えて、もとの勤勉なサラリーマン生活に還った。

僕はこの三年間で機会を利用しては、中国のいろいろな場所に出掛けた。前号に書いた内モンゴル、天山山脈、チベットの他に、零下三〇度の真冬のハルピン、摂氏五〇度の暑熱のトルファン、山東省の泰山、河南省の嵩山、北朝鮮との国境の長白山（白頭山）等々を訪れた。さらに、今号に書いたように、ヨーロッパ、アフリカ、アメリカの山々も訪れることができた。それらの山々を巡って得た楽しい思い出は、僕の心いつまでも残るだろう。



会 員 近 況

先般の「昭和六一年度針葉樹会総会」に際

して、皆様から、出欠通知をいただきましたが、返信の「近況」欄を見ますに、なかなか活発に登られている方もいらっしゃる様です。編集子のご了解もなく勝手に選ばせていただき恐縮ですが、席上で披露したうちのいくつかをご紹介させていただきます（順不同）。

金田 近二 大正一五年卒（名誉会員）

八五才。ご多分に洩れず、身体のあちこちが大分くたびれて来まして旅行は閉口です。ご盛会を祈ります。

宮城 賢三 昭和三六年卒

沖縄に帰って来て三年になります。山らしい山がなく、海と親しんでいます。

上原 利夫 昭和三三年卒

五月三・四日に佐藤さんと常念岳へ。私にとって北アルプスは一五年振りでした。

山本健一郎 昭和三二年卒

年初来、四阿山、巻機山、八甲田、燧岳等に行きました。

石和田四郎 昭和三一年卒

五月二四日九十九里浜七〇キロ歩破。九時間五一分、三〇〇人中四九番、七回連続出場。六一年五月八日付で、三井東圧化学千葉工業所次長から、本社中国事業開発室長に転勤、大中国相手にどうなることかと思案中。横山シルバー・ボランティアの意気に学びたい心境。

白川 隆夫 昭和三〇年卒

岡山県の美作に丸太小屋ができました。機会がございましたらどうぞ。

伊藤 恙生 昭和二三年卒

三月二三日に車山へ日帰りスキーに出掛けました。二〇数年振りです。スキーも脚も折らず無事でした。

岩崎 利一 昭和一五年卒

奥武蔵などを歩く程度ですが元気にして

います。引地君の内モンゴルの記事（会報六六号）とても面白く拝見しました。

望月 達夫 昭和一三年卒

幸い元気で暮している。家の改築中のため今年に入ってから山行回数はいへっているが、一八回二二日山歩きに過ぎた。毎日サングラスの身としては聊か不勉強ならむ。

柿原 謙一 昭和一二年卒

六月一日JACのウエストン祭に初参加。五月二六日望月氏と上州の三峯山。五月一七日秩父の大持山・小持山。四月二九日両神山。同二四日吾妻耶山。

豊田 忠巍 昭和一〇年卒

幸いに相変わらずですが、体力の衰えは年相応で、相当ガタがきています。

近藤 恒雄 昭和四年卒

三月中に一度精進湖裏の三方分山頂附近迄行きました。雪のため途中から引き返しました。

会務報告

昭和六一年度総会は六月二五日（水）夕刻より如水会館松風の間にて開催されましたが、OB出席者三八名（委任状六七通により成立）および学生九名の参加を得、盛会となりました。

吉沢一郎氏（昭四年卒）のご発声による乾杯、および石井左右平会長のご挨拶に続き、早々に審議にはいりました。

当総会にて審議・承認された事項は次のとおりです。

一 昭和六〇年度 活動報告

(1) 懇親山行

イ. 夏の山行（8月16日～18日）
学生涸沢夏合宿訪問

ロ. 冬の山行（3月21日～23日）
八ヶ岳（横岳―天狗岳）

(2) 会合

イ. 評議員会（6月20日）

ロ. 総会（6月27日）

ハ. 臨時評議員会（10月3日）

ニ. 臨時総会（11月6日）
石井左右平氏を新会長に選出。

ホ. 新年会（1月22日）

ヘ. 幹事会

(3) 出版物

イ. 会報（第65、66号）

ロ. 「針葉樹」14号発刊

ハ. 「針葉樹」1～13号復刻版発刊

ニ. 会員名簿（一九八五年版）

二 昭和六〇年度 決算（後表）

三 昭和六一年度 予算（後表）

四 昭和六一年度 役員および幹事

(1) 会長

石井 左右平

(2) 副会長

石原 脩

(3) 評議員

岩崎 利一 上原 利夫

樋口 洪 沢木 一夫

根本 大 中橋 寿雄

小林 茂雄 岡田 健志

田中 一雄 俵 昭

笠原 広信 西牟田伸一

甘利 仁郎

(4) 幹事

代表幹事 佐藤 久尚

総務 岡部 寛史

安島 孝知

会計 山本礼二郎

引地 真

米田 篤裕

山行 宮下 克彦

石丸 義男

学生担当 近藤 泰

中西 茂

山本礼二郎

保険 石丸 義男

(5) 監事

山本健一郎
竹中 彰

(6) 新入会員紹介

当年度の新入会員はございません。

五 昭和六一年度 活動予定

(1) 懇親山行

当年度は以下の三回を計画致します。

- イ。夏の山行（8月）
- ロ。秋の山行（10月）
- ハ。冬の山行（3月）

(2) 会合

- イ。新年会（忘年会）
- ロ。学生合宿報告会
（夏合宿、冬合宿）

(3) 会報

当年度は三回の発行を予定します。

(4) その他

以上一連の議題の審議ののち、その他の議

題として、幹事会より「年会費徴収会則の一部改訂動議」が提出され、説明・審議の上ご承認いただきました。本動議は、昨今の針葉樹会の財務状態の改善を背景に提出されたもので、総会に先立ち評議員会にて審議・承認の上、総会に提出されたものです。内容は以下のとおりですが、昭和六一年度よりの適用となりますので、年会費ご請求の際の会計幹事からの連絡をご参照ください。

（付・動議資料）

年会費徴収会則の一部改訂について

針葉樹会会計細則第一項において、卒業後経過年数による会費の徴収基準が定められているが、最近の会の財務状態に鑑み、会計細則第一項を以下の如く改訂する。

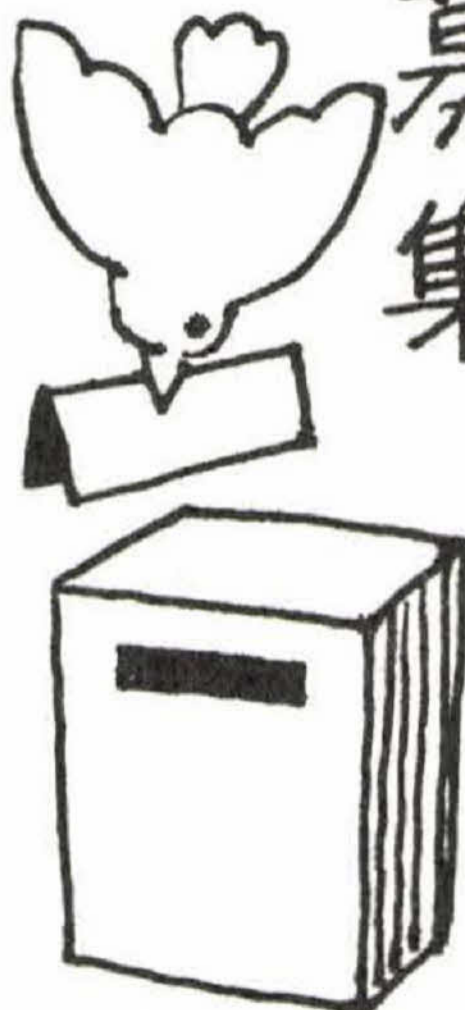
（現 行）

- 一 会費は、卒業後 一〇年迄四、〇〇〇円、一一年から

（改訂後）

- 一 会費は、卒業後 一〇年迄四、〇〇〇円、一一年から

原稿募集



会報幹事は、原稿をおおいに募集しています。今年度は最低3回は会報を出します。そのためにも皆様からの原稿が必要です。なつかしの歌、そろそろ時効のはなし、最近入れあげていること、昔入れあげていたこと、等々お待ちしております。

- 二〇年迄五、〇〇〇円、二一年から
- 四〇年迄六、〇〇〇円、四一年度以降四、〇〇〇円とする。
- 二〇年迄五、〇〇〇円、二一年から
- 四〇年迄六、〇〇〇円、四一年から
- 五〇年迄四、〇〇〇円とする。

以上

昭和60年度決算

I. 一般会計

収支計算書 (60.6.1~61.5.31)

(円)

支 出	金 額	収 入	金 額
①会報・名簿発刊費	313,000	①納入会費	758,000
②山岳部活動補助	250,000	②雑収入	7,542
③ " (保険料)	72,600	③前年度より繰越	485,496
④通信・連絡費	125,000		
⑤諸経費	4,553		
⑥次年度へ繰越	485,885		
合 計	1,251,038	合 計	1,251,038

II. 遭難対策基金

収支状況 (60.6.1~61.5.31)

(円)

支 出	金 額	収 入	金 額
学生保険料	72,600	前年度末基金有高	2,923,758
当年度基金有高	3,238,758	学生保険料 一般会計 から振替	72,600
		雑収入	104,210
		復刻判・14号製作剰余金※	210,790
合 計	3,311,358	合 計	3,311,358

※復刻判並びに14号の剰余金は全額、遭難対策基金に繰り入れることと致したい。

昭和61年度予算案 (61.6.1~62.5.31)

I. 一般会計

(円)

支 出	金 額	備 考	収 入	金 額	備 考
①会報発刊費	600,000	3回分	①納入会費	800,000	
②山岳部活動補助	250,000		②雑収入	8,000	
③ " (保険料)	100,000	学生11人	③前年度より繰越	485,885	
④通信・連絡費	140,000				
⑤諸経費	15,000				
⑥次年度へ繰越	188,885				
合 計	1,293,885		合 計	1,293,885	

II. 遭難対策基金

(円)

支 出	金 額	備 考	収 入	金 額	備 考
学生保険料	100,000		前年度末基金有高	3,238,758	
当年度基金有高	3,260,790		学生保険料 一般会計より振替	100,000	
			雑収入	22,032	利息
合 計	3,360,790		合 計	3,360,790	

|| 会務連絡先 (一九八六年度) ||

総務幹事 岡部 寛史

日商岩井・エネルギープラント部

Tel〇三(五八八)二六二九

〒一四〇 品川区大井六一―一三一

日商岩井雄心寮

Tel〇三(七七七)〇〇四六

同 安島 孝知

ベイン&Co. ジャパン

Tel〇三(五〇二)六四〇一

〒一六七 杉並区上荻

一―二二―二五―二〇二

Tel〇三(三九二)五一七九

会計幹事 山本 礼二郎

三井銀行堀留支店

Tel〇三(六六一)〇二八一

〒二七一 松戸市小根本二三八一

三井銀行松戸寮

Tel〇四七三(六五)七七八九

(年会費納入口座)

・三井銀行堀留支店

口座番号 五一二七〇四二(普通預金)

・郵便振替 東京 二―一六六八七

*名義は「針葉樹会」。

保険幹事 石丸 義男

三井物産 合成樹脂第一部

Tel〇三(二八五)五一九二

〒二七三 船橋市前貝塚二六六一―三

三井物産船橋寮

Tel〇四七四(三八)五六九一

(保険料振込先)

・三井銀行三井物産ビル出張所

口座番号 五〇五〇七六五

(普通預金)

*名義は「針葉樹会」。

会報幹事 引地 真

三菱倉庫国際部中国課

Tel〇三(二七八)六五五〇

〒一六七

杉並区南荻窪三―二九―二三

三菱倉庫荻窪寮

Tel〇三(三三二)八七六〇

同 米田 篤裕

日本輸出入銀行審査部

Tel〇三(二八七)一二二一

〒一七六 練馬区早宮

一―二四―一七―三〇一

Tel〇三(九九三)七〇六〇

山行幹事 宮下 克彦

三井物産厚板貿易部

Tel〇三(二八五)二四六三

〒二七三 船橋市前貝塚二六六一―三

三井物産船橋寮

Tel〇四七四(三八)五六九一

同 石丸 義男

(前述保険幹事の項参照)

○ 山岳保険事故通報にかかる連絡体制について

現在日山協の保険に(希望者のみ)加入しておりますが、保険の適用要件として、

①山行計画書の事前提出②現地警察等への入山届けの提出が義務づけられています。

山行計画書の提出先は針葉樹会保険幹事宛となっておりますので

保険幹事、石丸義男もしくは総務幹事、安島孝知まで、事前に手紙等でご連絡下さい。

針葉樹会会員名簿（1985年版）正誤表（61年10月1日現在）

ページ	氏名	改訂箇所	改訂後の記述	連絡日
9	豊田忠巍	自宅電話	022(61)1410	86. 6. 6
11	宮城恭一	自宅住所	〒107 港区南青山5-1-10-1206 Tel03(498)7390	85.12. 2
11	深谷光茂	勤務先	〒151 渋谷区千駄ヶ谷4-19-18 大京観光	85.11.30
11	久保孝一郎	自宅住所	〒150 渋谷区宇田川町33-14	86. 6. 4
12	林正敏	自宅住所 勤務先	〒862 熊本市水前寺6-47-23-302 Tel096(381)6056 〒860 熊本市城東町4-2 (株)熊本ホテルキャッスル Tel096(326)3311	85.12.10
12	高野秀男	勤務先	(御退職)	86.12. 5
12	野尻七郎	自宅電話 勤務先	03(324)6241 〒文京区関口2-11-31 大日園芸(株) Tel03(947)1151	85.12. 3
13	山崎 擴	勤務先	(株)桂精機製作所	
13	田中一雄	"	〒107 港区赤坂2-17-22 赤坂ツインタワー本館 アマックス・アジア(株)	86. 6. 4
13	島影礼一	自宅電話	03(454)6546	
14	小泉三好	勤務先	〒104 中央区八重洲2-2-1 日本容器流通(株) Tel03(271)4831	85.12. 4
14	横山皖一	自宅住所	中華人民共和国山西省運城市運城賓館308号	
15	中村正司	勤務先	東京海上保険 Tel03(212)6211	
15	荒砥道虎	"	三菱自動車工業(株) 総務課	
16	石原 脩	勤務先Tel	03(211)1371	
16	白川隆夫	勤務先	イソライト住機(株) Tel06(341)1246	86. 6.12
16	奥野巖根	勤務先Tel	03(215)7771	86. 6.10
16	高崎治郎	勤務先 勤務先Tel	〒107 港区赤坂8-5-32 ギアバルクLtd. (ジャパン) 03(478)3052	
17	石和田四郎	勤務先	〒100 千代田区霞が関3-2-5 三井東圧化学(株) 中国事業開発室 Tel03(593)0679	86. 6. 7
17	宮川次夫	"	太陽神戸銀行 東京本部	
17	山本健一郎	"	〒104 中央区銀座5-10-2 (株)住宅総合センター Tel03(573)3341	86. 2.12
17	甘利仁郎	勤務先Tel	0426(63)4685	
18	岡垣治雄	勤務先	〒153 目黒区下目黒6-1-21 三井信託銀行 事務管理部 Tel03(714)2211	86. 6.16
18	中村 保	勤務先Tel	03(244)5833	
20	市川陽一	勤務先	〒604 京都市中京区烏丸通御池上ル 明治生命京都ビル 日本電産(株) Tel075(211)1160	86. 1. 4
20	大橋喜治	"	日本坂硝子(株)	
20	渡辺嘉佑	"	コスモ開発(株) 関連事業部 Tel03(798)3531	
20	小峰 降	自宅住所	〒610-03 京都府綴喜郡田辺町松井ヶ丘1-8-20	
21	宮城賢三	勤務先Tel	09899(4)2485	
21	中島 寛	自宅住所 勤務先	〒167 杉並区桃井4-5-3-1005 Tel03(397)8753 日本長期信用銀行 営業7部 Tel03(211)5111	
22	永井新也	勤務先	久保田鉄工(株) 東京本社 住宅機材営業2部 Tel03(245)3705	85.12.31
22	朝木大統	自宅住所	〒064 札幌市中央区南13条西15-3-31-403	
23	倉知 敬	勤務先	〒100 千代田区有楽町1-12-1 (株)日本リース 財務部	

ページ	氏名	改訂箇所	改訂後の記述	連絡日
23	蛭川隆夫	自宅住所 勤務先	〒215 川崎市麻生区王禅寺2657-47 Tel044(955)5788 (株)日立製作所 情報産業部 OA事業部 営業技術部 Tel03(763)2411	
23	竹中彰	勤務先	〒100 千代田区丸の内1-3-3 日本興業銀行 管理部 Tel03(214)1111	86. 2.20
24	中橋寿雄	自宅住所	〒184 小金井市前原町3-12-20 Tel0423(85)7570	86. 2. 3
24	小島和人	勤務先	Fujitsu Espana S.A. EDIFICIO IDERIA MARD II 8a Planta Oficina B, Abda de Brasil 5, 28020, Madrid,Spain	
24	三森茂充	自宅住所	〒182 調布市多摩川4-20-8 Tel0424(84)7427	86. 6.12
24	小野筆	自宅住所 勤務先	〒064 札幌市中央区南13条西18丁目 Tel011(561)6650 〒060 札幌市中央区大通東1 北海道電力(株) 立池環境部 Tel011(251)1111	
25	原博貞	勤務先	住友商事(株) 東京鋼管第1部 Tel03(237)4180	86. 6. 5
25	岡田健志	"	住友化学工業(株) 合成樹脂部 Tel03(278)7231	86. 6. 9
25	斎藤正	"	(株)小松製作所 財務部	86. 1. 2
25	中村雅明	勤務先Tel	03(283)5541	
26	俵昭	勤務先	住友電工(株) 通信営業部 電気通信課 Tel03(423)5111	86. 5.29
26	宮武幸久	自宅住所 勤務先	〒281 千葉市花園5-17-16 旭硝子花園荘2-402 旭硝子東京支店 硝子建材開発課 Tel03(283)9427	
26	金子晴彦	勤務先	日本航空 貨物本部 マーケティング部	
26	戸川哲夫	氏名	戸川哲哉	
26	西牟田伸一	自宅住所 勤務先 勤務先Tel	〒202 保谷市ひばりヶ丘北3-7-3 Tel0424(23)1968 〒100 千代田区丸の内2-5-2 三菱化成工業(株) 経理部 03(283)6343	
26	藤巻悟	自宅電話	011(731)2764	
27	加藤博行	自宅住所 勤務先	2606 Moray Ave. San Pedro, CA 90732 U.S.A. Japan Line(U.S.A.), Ltd, Los Angeles Office	
27	兵藤元史	自宅住所 勤務先	〒273 船橋市若松2-8-11-205 Tel0474(32)9105 石油資源開発 海外本部 Tel03(584)0511	
27	浅田充	自宅住所	〒232 横浜市南区別所中里台27-1-C410	
28	佐藤活郎	自宅住所 勤務先	〒252 藤沢市鵜沼東4-19-402 Tel0466(24)3850 海外経済協力基金 調査開発部 Tel03(215)1311 ext591	
28	近藤泰	自宅住所	〒194-01 町田市三輪町2297番地 Tel044(987)5991	
28	佐藤周一	勤務先Tel	0864(56)0655	
28	中西茂	自宅住所 勤務先	〒140 品川区大井6-13-1 日商岩井雄心寮 日商岩井 財務部 Tel03(588)3810	
29	岡部晃和	自宅住所 勤務先	〒761-01 高松市屋島中町7-22 Tel0878(41)6754 日本債券信用銀行 高松支店 Tel0878(21)5521	
29	石川保典	自宅住所 勤務先	〒396 長野県伊那市下春日町5003-4-5 Tel0265(78)6359 中日新聞伊那通信局 Tel0265(72)2405	
29	稲毛尚之	勤務先Tel	06(251)6115	
29	五ヶ山淳	自宅電話 勤務先	052(381)8832 中部電力(株) 名古屋南営業所 Tel052(682)2361	

物故会員 高木英二(昭4卒) 昭和60年6月29日 病没
森脇芳之(昭13卒) 昭和59年6月27日 病没
後閑勉六(昭38卒) 昭和61年1月11日 病没

編集後記

暑い夏から急激に寒くなりました。山々からは早くも積雪の知らせが届いています。冬山の計画を考えなくてはならない時期になりました。

今号より会報の編集をさせていただくことになりました。今回は「自作自演」でなんとか発行にこぎつけましたが、原稿の集まりが思わしくなく編集者は苦しんでいます。不向きを思われる会報幹事ですが、皆様の御投稿をたよりにがんばって務めたいと思います。

